神奈川県立歴史博物館
Kanagawa Prefectural Museum of Cultural History

論題	葬送儀礼の持続と変化について―大和市深見地域の事例を中心に―
著者	鈴木通大
掲載誌	神奈川県立博物館研究報告―人文科学―　第 26 号
ISSN	0910-9730
刊行年月	2000 年（平成 12 年）3 月
判型	JIS-B5（182mm × 257mm）

【研究ノート】

葬送儀礼の持続と変化について

―大和市深見地域の事例を中心に―

鈴木通大

【要　旨】

葬送に関する研究は、近年、臓器移植と脳死などの問題にみられるように「生と死の境界」に関する研究などが盛んになるにつれ、ふたたび注目されるようになってきた。

本稿では、都市化などによって激変・滅失する民俗のなかで、とりわけ消滅しにくいといわれてきた葬送習俗に視点をあて、モデルとなる地域社会を設定して、そこで葬送習俗の持続と変化について明らかにすることを試みる。そこで、県下の大和市深見地区における伝統的な葬送儀礼と最近の新しい葬送習俗の民俗調査を実施し、消滅した習俗、変化した習俗、持続している習俗などを捉えることにつとめた。

その結果、葬送習俗は、土葬から火葬に移行する時期や、葬儀社が大きく関与してくる時期に大きな変化がみられることを指摘できる。さらに、近年は葬儀社の進出により、葬式のあり方がマニュアル化し、しかも画一化している傾向が強くなっているといえよう。

【キーワード】　変化　講中　オトムライ　ジワケ　葬儀社

プロローグ

都市化などによる社会の変化によって、伝統的な地域社会における年中行事・通過儀礼（人の一生）・生業などの民俗が滅失している状況は昭和三〇年代中ごろから指摘されつづけてきたことである。ある意味において、民俗という事象は時間・空間のなかで持続・変化・消滅・生成の行動を繰り返しているといえる。近年、臓器移植と脳死という問題が多くの人々の関心を集め、とりわけ人の「生と死」をめぐる課題が注目されている。また、死を迎える場所として病院が一般的となり、しかも葬儀は自宅から専用の式場でおこなわれるような状況になっている。

近年の葬式は、どちらかといえば自宅で営まれるよりも、むしろ葬祭場といわれる場所でいわゆる葬儀業者の手によって進められることが多くなっている。この点については、山田慎也によると、「現在、葬祭業者を利用せずに葬式を出すことはほとんどないであろう。葬祭業者はじっさいに葬儀を請け負って作業するだけでなく、何をどのように、またなぜするのかという葬儀の方式や意味づけなどを提供するようになってきた。死を処理するための専門家として、葬祭業者の担う役割は日々大きなものとなっている」[1]といい、さらに山田は葬祭業者が葬儀に全面的にかかわるようになったのは高度経済成長期以後のことであると指摘している。

また、葬式には霊柩車がつきものであるが、この点については井上章一によると、霊柩車とは葬儀・告別式の会場から火葬場まで遺

体をおさめた霊柩を運ぶ自動車の総称のことで、この霊柩車の普及は「とむらいのありかた、とりわけ葬送の手続きを、いちじるしく変えてしまった」[2]と指摘している。

かつて、柳田は「葬制沿革史料」のなかで、「東京などのオトムライという語は、よく考えてみるとやはり一種の忌詞らしい。トモラウというのは葬後の供養のことなのだが、今は是を行列とも、又葬式の全部とも解しているのである」と述べており、しかも東京のトモライに近い名称は隣接地域にはあまりなく、遠く離れた鹿児島県下甑島の一隅に、トイオクリという名があることを早い時期に指摘している。[3]このことから、オトムライということばが、本来、忌み言葉であったらしいが、やがて葬式などを意味することばになったことがわかる。大和市域でも、トムライ、オトムライといっているが、近年は葬式と呼ぶことが多くなっている。

ここでは、現代生活のなかでいまだに変化をしながらも持続している葬式（葬送儀礼）、すなわち、その移り変わり、すなわち持続と変化を把握するために大和市域の事例をひとつの手がかりとして、その実態を明らかにしてみたい。

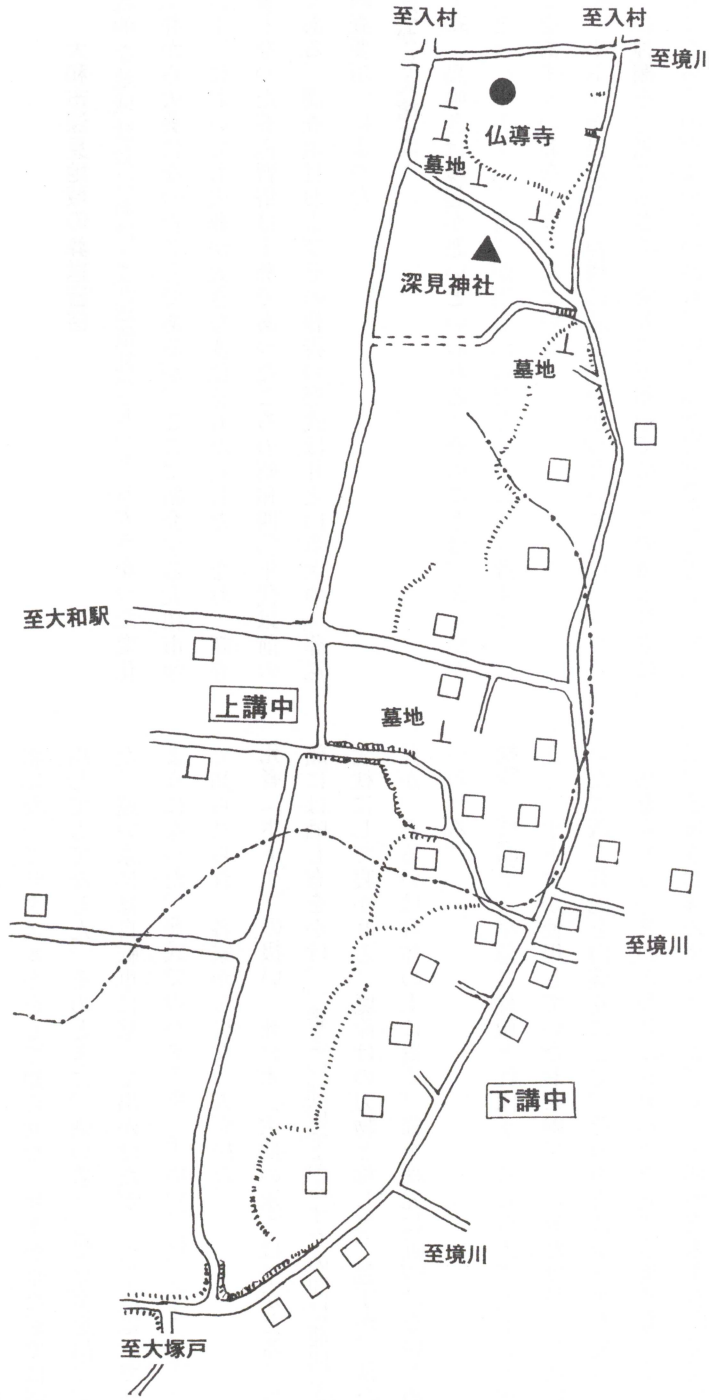
地域社会における伝統的な葬送習俗

調査地の概要　調査地である神奈川県大和市深見地域は、『新編相模国風土記稿』によると戸数百二十と記され、江戸時代には旧高座郡深見村といい、明治初期に大和村深見、大和町深見を経て、一九五九年から大和市深見となり、現在に至っている。この深見地区は、一の関（一ノ堰）、島津、坊之窪（坊ノ久保）、入村、宮下、大塚戸の六集落から構成されている。大塚戸は、一九四二年（昭和一七）に厚木飛行場が建設されたために、蓼川村（現綾瀬市）から移転してきた家によって形成された。この深見地域から深見神社の下にあり、境川流域に面した宮下というムラを選定した（図参照）。古くは二七戸であったが、現在は新住民の住宅も約四〇〇戸に増え、屋敷構えによってかつての原風景を偲ぶことができる。

氏神は明治初年に鹿島社といわれていた深見神社は、相模国十三座の一社で、寺院は仏導寺（浄土宗）で、大半の家が檀家である。青木姓が一〇、富沢姓四、山口姓七、板庇姓二、小林姓二、高橋姓二となっている。　この深見にも、ジルイ（地類）、ジワケ（地分け）、ジミョウ（地苗）、ジシンルイ（地親類）といわれるものがあり、土地を分けた関係であるとか、本・分家の関係であるとかいわれているが、葬式や結婚式の際に重要な役割をはたしている。深見の宮下だけが、ニワバともいわれている。

葬式の際、互助協力を主としたコウジュウ（講中）といわれる組織が各集落にある。宮下では、上講中一三軒（富沢、高橋、山口）と、下講中一四軒（青木、板庇、小林）の二講中からなっている。最近は戸数が増えたので、中講中ができて三講中に分かれている。

大和市域では、ジワケが葬式を一切仕切る。講中内から死者が出ると、各家から男女一名ずつの二名が手伝いに出る。かれらには、



宮下の概念図

料理の手伝い、天蓋・旗・草鞋などの葬具作り、野辺送り、棺担ぎ、穴掘りなどの仕事がある。そこで、つぎに当該地域の葬送習俗について報告する。

大和市深見地域の葬送習俗

伝統的な地域社会における葬送儀礼でもっとも大きかった変化は、土葬から火葬になったことであるが、ここで紹介する大和市深見（宮下）においても火葬が大きな変化をもたらした。なお、調査の対象となった葬送習俗は土葬であったころの昭和四〇年代以前のことである。調査項目およびその報告の形式は井之口章次の「葬送習俗調査要項」[4]によった。

（1）死から入棺まで

死の予兆　烏鳴きは縁起が悪いといわれる。そのことは、よく烏が鳴いたときにホトケ（死者）が出るからだといわれる。近年は、このことをあまりいわなくなったという。

死の忌　ホトケが出ると、神様に忌みがかからないように、ジルイがすぐに神棚を白紙でふさぐ。隣りの下和田では、この紙は長老に剥がしてもらうのがよいといわれている。死の忌みをシボクといい、厳重に守った。シボクの期間は四十九日であるが、固い家では、一年間、神社へ参詣しないし、祭りにも参加しなかった。また、祭りの際に親戚の客なども招待しなかった。ふつうは百箇日過ぎれば、忌みがかからないとしている。また、四十九日の餅を搗いた後は、いつでも餅を搗いてもよかった。

サタアルキ（知らせ）　ホトケが出ると、ジワケがそろってオクヤミに出かける。そして最初に寺へ知らせてから、親戚などへ二人一組になってサタアルキをして知らせた。サタが来た家では酒などを出してもてなした。そのときに、酒の肴として豆腐を出す家もあった。遠い家には自転車に乗って出かけたが、近年は電話で知らせるようになった。葬式でのハタラキ（手伝い）は、イイツギ（家継ぎ）で知らせられ、各家から男女二人が出た。

死者（ホトケ）の扱い　死に水（末期の水）は子がとる。ホトケの顔には晒し布をかけ、一番よい部屋であるオクの間に蒲団を敷いて、北枕にして寝かせる。魔除けの刃物と称して、包丁か、鋏などを枕元か、あるいは身体の上に置く。猫を枕元に近づけないためだともいわれる。

枕飯・枕団子　早急に枕飯と枕団子をこしらえてホトケの枕元に供える。ホトケが使用していたお茶碗で一杯分だけ量って炊いた。炊いたご飯で茶碗を山盛りにして、その中央にホトケが使っていた箸一膳を立てる。箸のかわりにシカバナを立てる地域もある。枕団子は、蓋付きお椀のオカサ（蓋）で、一杯の玄米を石臼で挽いて一二個作ったものを茹でる。この枕団子は、野辺送りのとき、お膳に載せて墓へ持っていき、穴の中に埋めるという。

また、枕飯や枕団子はニワに三本の木を組み、鍋を吊して炊くか、ニワの天井から縄を吊し、鍋をぶら下げて、下から火を燃やして炊

く。このときに使った縄、灰、杓子は寺に納めた。

湯灌　ユカン（湯潅）はユアミともいわれ、昔は奥の間の畳をあげ、裏返しにした筵の上に盥を置き、その中にホトケを入れて湯灌をおこなったという。湯灌の前に女性がみんなで人針ずつでもキヨカタビラ（経帷子）を縫うが、縫う人数が多ければ多いほどよいといわれた。布は刃物を使わず手で裂き、麻糸で結び玉を作らずに縫った。

湯潅の水は、水のなかにお湯をいれた逆さ水を使う。この水は、人目のつかないところに捨てた。湯灌はジワケが中心になって、最初に酒を飲み廻し、一本箸で豆腐を食べてからはじめ、最後に塩で手を浄めた。

納棺　湯灌が終わった後、ホトケに死装束として経帷子を着せて頭に三角布をつけ、手甲脚絆、草履を履かせる。首に六文銭を入れた頭陀袋をかけた。桑の杖を持たせるとあの世でも長生きするという。棺桶は寝棺であるが、古くは座棺であった。棺桶の材料は、杉でもよいが松が一番である。第二次世界大戦後ごろは、板さえあれば作ったという。その他に天蓋・小天蓋は竹で作り、銅鑼を叩く藁棒、左縄のツッカケ草履（藁草履）、旗四本、位牌（白木）などを講中の仲間が作る。

穴掘り　穴掘りはタイヤクといわれ、講中から廻り番で二人ずつ出る。スコップ、トングワ、箕などはホトケを出した家で用意する。穴掘りが終わると新湯に入り、本膳の正座に坐り、引物は二人分をもらう。家に不幸などがあると、当番からはずれる。

穴掘りの場面（津久井郡津久井町鳥屋）

通夜　戦前は身内とクミアイだけが残り、線香を絶やさないものだといわれた。また、夜を徹して営まれたという。近年は、告別式に出るより、通夜に訪れるのが一般的になっている。

葬式　葬式をトモライという。トモライは死亡してから三日目くらいにおこなわれる。葬式は友引の日をさけるといい、また寅の日が嫌われるのは、寅が行って帰るからだといわれる。

（2）出棺・野辺送り

食い別れ　出棺前に棺の蓋を石で打ちつけるが、そのとき最後の食い別れと称して一膳の汁かけ飯を一本箸で身内の者が食べ合う。

出棺　草履を履いたまま、ジワケの四人がコシ（棺）を担いで縁側からニワに出るが、このとき、二人で持ったカリモン（仮門）をくぐる。親類の者がコシを支える。コシには、ホトケの着物を掛けたが、最後にその着物はカケムク料といって寺に納めた。また、コシの上には小天蓋をかぶせた。土葬のときは、ニワの真ん中にタチウスを北向きに寝かせておき、その廻りをハタが先頭になって、コシを担いだ葬列が左回りで三回廻る。葬列をトモといい、子、兄弟姉妹、仲人、講中の仲間などが立つ。昭和三〇年代末まで、女性の喪服は白色であった。

出棺が終わると、手伝いの女性たちが座敷にシオバナを振って掃除をしたが、実際は掃く真似をする程度であったという。

葬列　葬列は、①龍頭を先頭に、②カネ（鉦）、③太鼓、④ハタ（旗）、⑤棺、⑥位牌、⑦写真、⑧膳、⑨家族、⑩親類、⑪一般、の順序である。龍頭はクミアイの人が紙で作ったが、寺から木製の龍頭を借りる地域もあった。ハタは宗派によって異なるが三～五本で、寺で作ってもらった。位牌はイセキといわれる相続人が持つ。写真は子、膳は妻が持った。

オシノギといって出棺が昼頃になるので、一時しのぎの腹こしらえのためにオノギリ飯や煮〆に酒を添えて、送りにきた人や手伝いの人に食べてもらう。場所は納屋などにムシロを敷いて坐ってもらう。

埋葬　昔はツジロウ（ロウソク）は六道の辻のしるしで、墓までの道の角かどに一本ずつ立てたが、現在では三本まとめたものを二本墓地の入口に立てる。墓地で麦藁の松明を燃やしているところをコシが通るが、これを迎え火とか魔除けとかいっている。僧侶の読経が終わると旗、天蓋、仮門などを墓穴の中に入れ、近親者がヒトコモリずつ土をかけた後、穴掘りが埋める。埋葬した後に念仏をあげた。帰りは墓地の入口に草履を脱いで、往きとはちがう道を通って帰る。一年に二度葬式があったときには、藁人形を作り箱のなかに入れ、別の場所に埋めたという。

七日の経　埋葬して墓から帰ると、ナノカ（七日）のお経をあげる。本膳の上座には、穴掘り当番がつく。寺参りには、遠い親戚の者が加わる。ナノカのお膳は、寺参りから戻ると始まる。穴掘りも席につく。それが終わると、ハチハライといって手伝いの女衆の膳が出るが、男衆が給仕をおこなう。最後に、講中の念仏があり、お膳が出る。

キヨメ　ミオクリ（野辺送り）から帰ると臼の上の置いてある塩をとり、盥の水で手足を洗って浄める。

ネンブツマワシ（念仏廻し）　ミオクリとか、オネンブツといって、キヨメの本膳が終わった後、濃い親類が残ったもとに講中が集まり、十三仏のオヒョウゴ（掛け軸）をかけて念仏を唱えながら数珠を回す。

香典　ハタラキに男女二人がくるような関係を、昔から「二百二升の義理」といった。二百とは二百文（のちに二〇～三〇銭）で、相

互扶助の関係であるので誰でもつき合えるように香典の金額が少なく済むことをいっている。米は二升袋に入れ、お金はオヒネリにして袋に結びつけたり、米袋の上にのせて葬式の当日、持参した。昭和初年の生活改善運動で香典や引物をやめた地域もある。宮下講中では、ヒャクジコウコウといって、講中のなかで義理のない家は金を少しずつ出し合って持っていく慣習もあった。また、嫁の実家、子、濃い親戚などからはハンダイ（飯台）二つ（一駄あるいは一荷ともいう）の赤飯が届けられる。または赤飯代として現金が届けられる。不祝儀の場合は麻縄を用いた。不祝儀の場合、ムシモノといい、これを荒縄で縛った。なお、

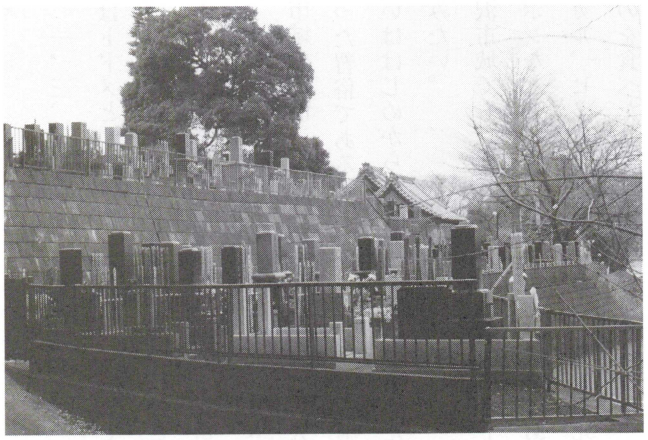
ふつう、赤飯を持ってくる家は一軒にし、あとで生米か、赤飯料と称して現金で持ってくるが、その際、半紙に「赤飯一駄　何某」と書いて座敷に張り出したという。宮下講中ではハンダイは、膳腕や柳樽とともに講中で所有していたが、特定の家で所有している講中もあった。

(3) 供養

香典返し　香典返しを引物という。不祝儀の引物は、かつては餅饅頭であったが、大正時代ころから羊羹や蒸し饅頭になり、近年は酒、茶、その他の品物になっている。餅饅頭の頃は、家で餅を搗き、職人に作ってもらったという。羊羹や蒸し饅頭のころになると、厚木や町田の菓子屋に頼み、その折り詰めを荷車で取りに行った。引物をもらった家では、白木の位牌にコヨリをとじつけて仏壇に入れて供養した。

死者の着物　よい着物はコシにかけて墓まで持っていき、その後、寺へ納めた。また、ホトケの着物を軒下などで北向きに干し、七日間柄杓で朝晩に水をかけたが、これをミズカケという。家によっては、三十五日から四十九日の間、おこなったという。

墓地　ウチバカ（内墓）がほとんどある。内墓は、屋敷内や畑、または山寄りに作り、墓にいる先祖が子孫をいつも見守ってくれているという。墓地には木を植えるものではないといわれるが、シブ木



大和市深見の寺墓（仏導寺）

（香の木）は植えるものだという。墓地の場所には、山の縁、水のあるところ、風の少ないところで、主に畑や山林のなかが選ばれる。墓には、内墓のほかにテラバカ（寺墓）、共同墓地があるが、その多くが内墓である。

新盆　子や、オモトといわれる実家、施主の兄弟などは、新盆にカケブクロを持ってくる。カケブクロは晒しの四角い袋で、なかに小麦二升（米一升）を入れ、草履と扇子をつける。近年は現金になっている。盆の期間、三年間は縁先に岐阜提灯をさげておくが、この提灯は三年間が過ぎると川に流したという。

また、毎年、お盆の十五日か十六日の朝、先祖のオボンサマが買い物にいらっしゃるといって、弁当として茶飯の握り飯を仏壇に供える。

杉塔婆（津久井郡津久井町鳥屋）

年忌　一、三、七、十三、十七、二十三、三十三が年忌で、最後の年忌はトドメとかオサメといわれ、三三年である。年忌ごとに塔婆をあげて供養したが、トドメには杉の枝付き塔婆をたてた。

以上、大和市深見（宮下）の伝統的な葬送習俗の調査報告であるが、これらの習俗は、現在の葬送習俗の中に断片的に残っている。

隣接市域の事例　ここに紹介する事例は、大和市域でまだ確認できなかった習俗である。もしかして、すでに消滅してしまったのか、あるいははじめから存在しない習俗であったのか、これからも注意してみたい。

藤沢市域でも、葬式のことを一般的にオトムライ、ジャンボ、ジャンボンなどという。また、忌みの状態にあることをシニボク、ヒガカカル、ヒノカカリなどといい、他人が死者の家の火で煮炊きしたものを食べたり、煙草を吸ったりすると、汚れをかぶると考えられている。

ホトケが出るとすぐ茶碗一杯の米を石臼で粉にする。このとき、藤沢市域では二人は向かい合い左回しに挽き、六個の団子をつくる。一合の米を小さい鍋に入れ、外かまどと称して土間または屋外に三本の木を交叉したサギッチョを立ててそこへ吊して炊く。

さらに、同市片瀬では自分と同年の人の死を耳にしたときは塩ナメルといって清めの塩をなめ、災いが自分の身に及ばぬように願った。また、西俣野では塩を紙にくるんだものを二つつくり、耳にあて、

そのあと川に捨てたという。葬式のしらせと米つき当番が主なしごとであった。天蓋は太陽から死者の汚れを遮断する。[5] このような、いわゆる耳塞ぎとか、ミミダンゴといわれる同齢感覚の習俗が大和市域ではまだ確認されていない。

海老名市大谷ではお盆のとき人が死ぬと頭に擂り鉢を被せ埋めた。この習俗は藤沢市遠藤などでもみられたが大和市域では確認できなかった。トリオサメは杉の丸木を削り、寺で戒名を書いてもらう。真言宗の場合、杉の木に枝のついたものを墓に立てる。さらに、海老名市域では百か日の供養としてこの日あるいは百一日目に伊勢原市大山の茶湯寺へ参った。参る途中で亡くなった人と似た人に会うという。この習俗は、平塚市、大磯町、伊勢原市など、大山が眺望できる地域で顕著にみられる。以前は、跡取りが編み笠を被るという習俗もあった。[6]

葬儀社が関与した葬送について

以前は龍頭・天蓋などの葬具をクミの人たちが作っていたが、昭和三〇年代の中ごろから、葬儀屋（葬儀社）から借りる程度であった。平成のころになるとしだいに葬儀社によって葬式自体が仕切られる様相を帯びてきた。こうなると、葬儀社の進出は葬式そのものが商品化されると同時にマニュアル化を帯び、画一化してきたといえる。このことは、地域差がなくなり、金額差（経済差）という差異が生じてきた。ここで、紹介する葬式はある葬儀社でおこなわれている典型的な事例である。[7]

大和市内の斎場

遺体の迎え（安置）　最近は病院で亡くなる人が多いので、病院からホトケを自宅に運んで北枕にして安置する。魔除けや猫よけなどと称して刃物を布団の上に置いておく。このとき、家族とともに駆けつけた親戚や友人などと、死に水といって割り箸の先に脱脂綿を巻きつけたもので水をあたえる。葬式の場所は、葬祭場、自治会館、集会室など、家（自宅）以外でおこなわれることが多くなった。大和市域の旧家では、自宅以外で葬式をおこなうとジワケや親戚の者

に陰で批判されるという。

最近は、湯灌は病院で済ませて来ることが多いが、家でおこなうときはアルコールなどで身体を拭くことが多い。また、死に化粧といって、髪の毛を整えたり、ホトケの両手、両足の爪を切ったり、髭を剃ったりする。女性の場合は、薄化粧をする。

枕飾り　枕元には、枕飯、線香一本、蝋燭などを供える。家によっては枕団子を作る家もある。線香と蝋燭の火は絶やさないようにする。

葬儀社との打ち合わせ　葬儀の進行、手続きの代行、寺の手配などに打ち合わせをするが、ジワケが先頭に立って指揮する場合が多い。

納棺　僧侶の読経が終わるとホトケを寝棺のなかに納める。その際に、ホトケに死に装束として経帷子、数珠、手甲、脚絆、三角頭巾、頭陀袋、六文銭、足袋、草履などを身に着けさせる。また、生前に愛用していた衣服や眼鏡、煙草などを一緒に納める。六文銭は、五円玉で六個用意したり、紙に六文銭が書いたものが使われる。夏に葬式が出ると、とくに多くのドライアイスが棺のなかに入れられた。

通夜　友引の日は避けられる。葬祭場の式場や家の中に準備され、おこなわれる場合が多くなっている。祭壇は家で葬式をおこなう場合、利用者の要望や家の間取り、天井の高さなどに応じて二段、三段、五段が組み立てられる。祭壇には白木位牌、枕あんどん（灯り）、供物があげられる。灯りは近年蝋燭から電球になっている。

香典　近年は香典とともに花環が届けられ、花環は家や会場の外に飾られる。香典は、市販の香典袋のなかにお金を入れて持っていくようになっている。昭和以前はお金を美濃紙に包んでいたが、昭和前期ころから髪の元結に用いた水引を故事に因んで結びかけて使用したといわれている。とくに、香典帳は付き合いの範囲などを知る上でも重要な資料であり、多くの家で大切に保管されている。

香典返しは、「御会葬御礼品」としてハンカチ、靴下、お茶、酒などの品が「会葬礼状」とともに通夜や告別式に訪れた会葬者に配られる。

告別式　通夜の翌日に同じ場所で執り行われる。開始時間は昼付近の時間帯が多く、火葬場の使用と関連して決められることが多い。とくに最近は葬祭場を利用する家が増加し、大和市域でも、この五年間で三軒の葬祭場がオープンしている。式が終わると、出棺となり、火葬場へ霊柩車で運ばれる。

火葬場　大和市域には海老名市、綾瀬市、座間市の四市による広域組合方式の火葬場が大和市と座間市の境界に設立されている。火葬にされた遺骨は、桐や樅で作られた骨箱のなかに骨壷を入れるようになった。骨壷は納骨容器であるが、『葬送文化論』によると、いまでも長野県北部から上越地方にかけて納骨だけを使用しているという。

これ以降の儀礼は、ほとんど前述した伝統的な葬送儀礼と変わらないが、簡略化してきている。　初七日は、告別式の日におこなわ

れることが多い。また、料理も仕出し屋に頼むことが多くなった。

エピローグ

葬送儀礼において、伝統的な習俗と現代における習俗と比較してみると、明らかに差異がみられる。その差異が生みだされる要因は、都市化などの人口の急増や農業社会から工業社会への変貌など、いわゆる社会変化によってもたらされたといっても過言ではないであろう。こうした葬送習俗の移り変わりを時間軸であらわすと次頁の「大和市域における葬送習俗の年表」[8]のようになる。

では、どのように何が変化したのか、その点について列挙してみよう。

(1)埋葬法が土葬から火葬に変わったこと
(2)葬儀をおこなう場所が自宅から、その大部分が集会所・葬祭場に移ってきていること。
(3)亡くなる場所が畳の上といわれた家から病院に変わっていること
(4)葬儀の主体も葬式講中から葬儀社に移っていること
(5)死亡通知の方法が、徒歩・自転車で知らせていたが電話で済ませるようになったこと
(6)弔問客は会社などの職場関係者が中心になりつつあること
(7)ホトケの近親者（女性）が白の喪服を着なくなったこと
(8)内墓・屋敷墓から共同墓地に埋葬されるようになったこと
(9)引物に饅頭がなくなったこと
(10)飯台に赤飯を入れて届けることが見られなくなったこと
(11)最近、告別式より通夜に出席するようになっていること

以上、変化した点を指摘してきたが、とくに大きな変化とは土葬から火葬になったことであろう。また、旧家では枕団子などの伝統的な行事食をこしらえているし、家から葬式を出す家も少なくない。

次に、今でも持続しているものについてまとめてみよう。

(1)葬式という習俗が脈々と続いていること
(2)香典は米から現金になっているが、その香典がなくなっていないこと
(3)伝統的な社会では手伝いの慣習が続いていること
(4)初七日・三十五日・四十九日が続いていること。また、年賀はがきの辞退などにも死の忌みをみることができる
(5)北枕・魔除けの刃物をかならず守っていること
(6)年忌明けに杉の枝がついた塔婆を供えたが、いまでも塔婆に杉の葉をつけている家があること
(7)火葬になって穴掘り作業がなくなったが、穴掘り当番は残っていること

最後に消滅したものについてまとめてみよう。

(1)魂呼び・烏鳴きなどの呪術的習俗がなくなったこと
(2)経帷子は葬儀社が用意するようになったので、女衆が縫わなくなったこと
(3)湯灌がなくなったこと

大和市域における葬送習俗の年表

年　代	大和市域の葬送習俗	大和市周辺地域の葬送習俗
明治初期		・このころ、寒川町宮山では神葬祭になった
明治19年	・下鶴間村火葬場開設	
明治23年	・大和村火葬場になる	
明治40年	・「早桶柩７枚・中サシ２本　１円30銭」という購入記録がある	・このころ、寒川町一之宮に医院ができる
明治41年	・この時期の葬式で、公田では三日、七日に親類やクミアイを呼んで法事をしている	・このころまで、海老名市下今泉では座棺を使用していた
明治末	・このころから、上和田・下和田では棺を作らなくなった	・このころまで、藤沢市江の島では土葬であった　・このころまで、藤沢市域では竪棺であった
大正10年	・このころ、上和田では出棺前に食い別れといって膳の汁かけ飯を箸一本で食べた	
大正12年		・「海老名村生活改善規約」が出される
大正15年	・下和田講中の穴掘「順番規約」ができる	
大正末期	・このころまで、葬式の時、近親者の女性は白い喪服を着ていた。トムライのサタは徒歩であった。葬具はすべて手作りであった	・このころまで、海老名市上河内では座棺を使用していた
昭和初年	・このころ、長後に葬儀社ができる	
昭和5～6年	・寺で祭壇を安く貸し出した	
昭和初期	・このころまで、座棺であった。このころ、生活改善を機会に香典や引出物をやまるところもあった。また、トリオサメに杉の葉付き塔婆を立てる家があった。このころから、トムライのサタに自転車を使った	・このころまで、藤沢市域では血縁者などは白い色の着物を着ていた
昭和10年頃		・このころまで、寒川町では死者の身内は白い着物を着た。・このころ、厚木市に公営の火葬場が開設
昭和10年代	・このころから、高等町の葬具屋の棺を利用し始めた	・このころ、寒川町では棺が桶から座棺にかわる。また、このころ大八車のような形をした霊柩車が現れた
第二次世界大戦前	・このころまで、墓地から帰ると赤飯とケンチン汁の膳であった。このころ、クミアイの香奠は10～20銭が普通であった	・このころまで、海老名市大谷、中河内では座棺を使用していた
昭和26年	・大和町・渋谷村・綾瀬町の三町共同施設として火葬場が発足	
昭和35～36年	・このころまで、寺の祭壇を下和田では使用	・このころまで、海老名市域では土葬が多かった
昭和30年代	・このころまで、土葬であった。このころから火葬になる	・このころまで、寒川町では人力霊柩車を利用した
昭和40年代	・このころまで、寺の祭壇を宮久保では使用	・このころ、寒川町では座棺が使われなくなる。また、土葬から火葬に移り変わる
昭和52年	・海老名市・座間市・綾瀬市が大和市営火葬場改築計画に参加	
昭和54年	・広域大和斎場組合設立	
昭和57年	・大和斎場開業	
昭和50年代	・このころ、位牌分けの習俗が廃れてきた。トムライのサタは電話でおこない、寺には徒歩で行った	
平成３年	・「友引の日」の通夜の使用開始	

(4)土葬がなくなったこと

以上、気がついた点をいくつか指摘したが、たとえば火葬場・(病院の)霊安室・葬祭場などの実態を具体的に調査できなかったこと、生活改善運動の視点が欠如していたこと、[9]墓、位牌に関する習俗など、多くの課題が残ったので、今後の調査で明らかにしていきたい。今回は、調査もまだまだ不十分であり、気がついた点を指摘するだけの予備的考察にとどめ、本格的な考察は次の機会にしたい。

最後に、調査にあたって故富澤美晴氏、青木利光氏、板庇伊助氏、山口博氏、そして大和市つる舞の里歴史資料館の柏柳豊氏らに大変お世話になったので、ここに謝意を表したい。なお、穴掘り、杉塔婆(本館蔵)以外の写真は筆者が撮影したものである。

〈追記〉本稿は、本館が県内一九ヶ所で実施した民俗調査「人生儀礼の持続と変化」(平成七年度〜平成一〇年度)における筆者のデータをもとに、人生儀礼の研究会で発表した要旨に大幅な加筆訂正を加えたものである。

【注】

(1)山田　慎也、一九九九、「葬祭業者を利用することは—互助から契約へ—」(新谷尚紀編『死後の環境—他界への準備と墓—』、昭和堂)

(2)井上　章一、一九八四、『霊柩車の誕生』、朝日新聞社

(3)柳田　國男、一九二九、「葬制の沿革について」(『定本柳田國男集』第一五巻、筑摩書房、五二四頁)。

(4)井之口章次、一九五五、『仏教以前』、古今書院。この書に、「葬送習俗調査要項」が掲載されており、この項目からも伝統的な葬式をうかがいしることができる。その内容は次のようになっている。

それぞれの行為・物品について、土地での名称を知りたい。現行の習俗ばかりでなく、「昔はどうだったか」を聞く。村一般の風と、特殊な家だけの行事とを見きわめる。

1　葬式の総名　葬式のことを何というか。童語も聞く。◇死ぬという語を忌んで別のいい方はないか。葬式の隠語もあるか。◇死・葬式に関する予兆・禁忌を集める。

2　魂呼び　臨終に名を呼んだり、蘇生させるための呪法。◇魂呼びは誰が、どこで、何に向ってするのか。何か手に持ってするか。◇主としてどういう人の死んだ時に魂呼びをするか。急死・産死・夭折の場合に限るか。◇息をひきとる前に水を飲ませ、または振りかけることはないか。

3　死亡通知　死亡通知は誰が何人でどの範囲に行くか。何か持ってゆくか。◇臨終の際にも知らせの役をたてるか。服装・方式・持ってゆく物。◇どうしても一人で行かねばならぬ時は、何か持ってゆくか。◇村の辻に立って大声で、死亡者の出たことを知らせる風はないか。◇寺への死亡通知は誰がゆくか。穀物その他を持ってゆくことはないか。◇後の機会とも関連して、寺への贈与を一通り聞いておく。

4　枕飯　息を引きとるとまず第一番に何をするか。◇死体はどの部屋に置き、

どういう寝せ方をするか。死後硬直以前に体を縛る風があるか。◇死体に掛ける着物。蚊帳を吊って死体を入れることはないか。◇死者の胸の上や枕許に、魔よけのために何を置くか。またどんな妖怪が来るというか。◇枕許に供える物は何々か。水・一つ火・一本花などに注意。◇枕飯・枕団子の調整、供え方、後の始末。枕飯を炊いた時の灰の処置。◇死ぬとすぐ、死者の魂がどこかへ行ってくるという伝承はないか。

5　ひがかり忌み　忌のかかる範囲と日数。忌負けの俗信。◇喪家の標識。軒や表口にしるしをつけたり、簾を垂らす、門礼を立てるなど。◇神棚や付近の神社に対して、穢れを避けるためのしつらい。◇家畜は二代の主人に仕えさせぬとて、飼い替える風。

6　年たがえ　死者と同い年の者はどんなことをするか。弔問に来るか。葬列に加わるか。◇耳ふさぎの慣習があるか。食べ物で耳をふさぐ場合、後は食べるか、何処に捨てるか。

7　香奠　弔問の村人の持ってくる物。◇手伝い人が近所の家で飲食することがあるか。その費用の出所。◇葬式の際の飯米は籾から搗くか。どういう理由からか。

8　通夜　親族からの香奠。忌の飯を食う範囲。またその範囲の移動の傾向。◇通夜に夜食が出るか。どんな物を誰が出すか。◇近親者が死者と添寝をする風はないか。

9　葬具　種類と調整。一回毎に作る物と連用するものと分けて聞く。◇依り代系統の物に注意する。連用する物は保管する場所がきまっているか。◇棺の形式。甕棺も使うか。棺は誰が作るか。◇葬式組の機能・結束の程度などを細かく聞いておく。

10　入棺　湯灌・入棺は誰がどこでどんな服装でするか。◇湯灌の水はどこから汲んできてどこへ捨てるか。死体を動かす時の作法。◇死者の服装と副葬品。頭陀袋の作り方と入れるもの。◇入棺した人が共同飲食をすることがあるか。

11　出立ち　出棺前の飲食の膳につくのは誰々か。◇弔問の人や群集にも酒食を与えることがあるか。◇棺は家のどこから運び出すか。壁を壊して出すことはないか。◇出棺のとき軒に割竹をさしたり、仮門をくぐって出ることがあるか。仮門は後でどうするか。◇出棺時または途中で米などを撒くことはないか。弓で矢を射るか。◇棺の出たあと、家に残った人々は何をするか。

12　野辺送り　先頭から順に聞く。死者をどういう関係の人かを一々確かめる。◇葬列の出発以前に先行する役目があるか。特に火を持つ役に注意。◇位牌・食膳・香・水・杖・天蓋などは誰が持ち、どんな服装か。◇棺に死者の衣類や布をかぶせるか。善の綱は誰が曳くか。殊に女の髪形と服装。◇泣女があるか。儀礼的な泣き方、あるいは頼まれて特に泣く人があるか。

13　棺かき・穴掘り　従事する人、服装。◇棺かきの作法。他人に頼む場合には謝礼を出すか。◇墓地占定の方法。穴掘り人へ謝礼。

14　墓葬礼　埋葬を総称して何というか。◇庭や途中、または墓場についてから棺を廻すこと。◇墓穴に納めてから小石を投げ入れることがあるか。何のためと考えているか。◇墓地でも飲食するか。または餅を引っ張り合うような式はないか。◇埋葬の前後に、墓場で火を焚く風があるか。

15　火葬　火葬地帯では、いつ頃から火葬になったか。宗旨との関係。◇火葬

場を何というか。火葬方式。遺骨の処置。火葬の灰を撤くことはないか。

16　野帰り　埋葬または火葬を終えて帰宅する際、および帰宅してからの作法。◇途中または家の入口における塩ばらい。衣服の清め。帰宅してからの飲食。

17　墓じるし　埋葬した上への作り物。◇埋めた上に石をのせる場合は、台石と小石とに分けて観察する。◇土饅頭の上または周囲に、割竹や丸竹をさし立てる風と土地での解説。◇息つき竹を立てるか。そのとき死者の魂が何処にあると思っているかを考えながら聞く。

18　墓制　墓地の種類。呼称。◇共有墓か個人墓か。およそその傾向と位置。◇両墓制－一人の死者について、死体を埋めるところと石碑をたてる場所とが別になっている例。◇両墓の位置、距たり具合、墓参の期間と機会。埋葬物品と移葬の有無。◇その土地では何故に両墓制になったと考えているか。◇墓地に関係のありそうな、付近の地名。移住者の墓地。

19　喪屋　喪屋生活の痕跡を探る気持で聞く。◇埋葬後一旦家に帰り、改めて墓参する風。埋めた上への供え物。◇親族の忌籠りと墓上の小屋形。◇葬式を出した晩、講中組内の人々のする供養。

20　願もどし　生前に神にかけた願を、撤回するための作法。◇茶碗を割る、着物を逆しに振る、小石や洗米を投げる等、生前に願かけしたと否とに拘らず聞く。◇願もどしのために、または別個に、死者の衣類に水をかけて蔭干しにする風。◇産で死んだ女の場合にも着物を晒すか。また川のほとりで通る人に供養して貰う形か。

21　忌あけ　七日目ごろの荒火あけと、四十九日ごろの忌あけ。その間の行事。◇喪家の標識や死者への供物棚を撤回する時期。精進落しの飲食。◇七日目毎の供養。四十九日の餅の配分。一つだけ大きな餅を作るか。◇寺への謝礼と形見分け。◇年内に不幸のあった家の迎年準備と正月の行事。正月前の精進落ち。

22　仏おろし　忌あけまでの間に、巫女に死者の口寄せを頼む風。◇特に葬儀の日に近接するものに注意する。

23　月忌・年忌　行事とそれぞれの名称。◇最終年回の時期。石塔と位牌とに注意する。墓場に樹を植える風。◇最終年回を終えた死者の魂は何になるといっているか。◇死後の生れ替りの話。死ねば何処へ行くと考えているか。

24　異常葬法　非業の死をとげた人の葬法。流れ仏の扱い方。無縁の者の墓。家畜の墓。◇子供の墓と葬法。胞衣の墓。何歳から本葬式をするか。童墓と道祖神との関係。

(5)藤沢市、一九八〇、『藤沢市史　民俗編』、七二一～七五六頁。

(6)海老名市、一九九三、『海老名市史　民俗編』、三六五～四〇二頁。

(7)葬送文化研究会編『葬送文化論』（一九九三、古今書院）、岩手日報社出版部編『岩手の仏事（改訂版）』（一九九二、岩手日報社）新谷尚紀編、『死後の環境―他界への準備と墓―』（『講座　人間と環境』第九巻、昭和堂、一九九九）、柳田　國男『葬送習俗語彙〈覆刻版〉』（国書刊行会、一九七五）、和田　正洲「神奈川県の葬送・墓制」（『関東の葬制・墓制』、明玄書房、一九七七）、王子市婦人センター歴史同好会編『八王子のお葬式―聞いて歩いたお弔い―』（一九八七、八王子市教育委員会）などがある。

(8)寒川町、一九九一、『寒川町史　民俗編』、五〇三～五一七頁。ここに、

「できごとと生活の変化―生活史年表」という生活年表が民俗の移り変わりを見ることができる。

(9) 前掲書『海老名市史　民俗編』、三八七頁。望地自治会所蔵「海老名村生活改善会規約」（大正一二年九月一日）

葬礼ニ関スル事

一、葬礼又ハ告別式ハ多数参列スルヲ良トスルモ茶菓子ニ止メ他ノ飲食物ハ供与セザルコト

一、香料ハ通貨ニ限ルコト、シ近親者以外ハ弔意ヲ表スル足ル程度ノ額ニ止ムルコト

一、霊前ニ生花、造花、放鳥等ノ供物ヲ廃止スルコト

一、葬家ニ於テ酒ヲ使用セサルコト但シ湯灌酒及ビ鉢洗酒ハ少量ナレバ此ノ限リニアラズ

一、供養献立ハナルベク簡単ニナシ引菓子ヲ廃シ且ツ止メ得ザルモノノ外葬家ニ於テ飲食ヲ為サヾルコト

一、香典返シ等ノ陋習ハ断然廃止スルコト

一、冠婚葬祭等ニ於テ節約シ得タル金額ハ其幾分ヲ公共事業ニ寄付シ其残余ヲ貯蓄スルモノトス

【主要な参考文献】

浅香勝輔・八木澤荘一、一九八三、『火葬場』、大明堂

大林　太良、一九七七、『葬制の起源』、角川書店

井上章一・町田忍、一九九二、『Ｔｈｅ霊柩車』、祥伝社

板橋　春夫、一九九五、『葬式と赤飯』、煥乎堂

佐藤　米司、一九七一、『葬送儀礼の民俗』、岩崎美術社

新谷　尚紀、一九九二、『日本人の葬儀』、紀伊国屋書店

新谷　尚紀、一九九六、『生と死の民俗史』、木耳社

須藤　功、一九九六、『葬式―あの世への民俗―』、青弓社

芳賀　登、一九九〇、『葬儀の歴史〈増補版〉』、雄山閣出版

宮田　登、一九九九、『冠婚葬祭』、岩波書店（新書）

大阪人権博物館編、一九九七、『ゆれる生と死の境界』（図録）

神奈川県、一九七七、『神奈川県史　民俗編』

神奈川県立博物館編、一九六九、『串川・中津川流域の民俗』

神奈川県立博物館編、一九七三、『県央部の民俗（Ⅰ）―大和・綾瀬地区―』

国立歴史民俗博物館編、一九九九、『死・葬送・墓制資料集成　東日本編1』

国立歴史民俗博物館編、一九九九、『死・葬送・墓制資料集成　東日本編2』

土浦市立博物館編、一九九一、『他界への旅だち―生と死の文化とその周辺―』（図録）

大和市教育委員会編、一九八一、『上和田・下和田の民俗』

大和市教育委員会編、一九八二、『深見・上草柳・下草柳の民俗』

大和市教育委員会編、一九八三、『下鶴間・福田の民俗』